

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：32820

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07204

研究課題名(和文)粘土遊びの保育文化史的研究：子どもの表現に対する保育者の価値観に着目して

研究課題名(英文) A Cultural-Historical Approach to Clay Play in Early Childhood Education and Care: Focusing on Nursery Teachers' Values Regarding Clay Play

研究代表者

南陽 慶子(NANYO, Yoshiko)

こども教育宝仙大学・こども教育学部・講師

研究者番号：00802597

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、幼児教育・保育現場における粘土遊びの実践が、どのような考え方や価値観によって支えられているのかを明らかにすることである。まず、政府刊行物や主要な文献で粘土遊びに関する言説を概観し、粘土遊びの教育的価値が時代とともに拡大していったことを明らかにした。次に、保育者を対象としたインタビュー調査で得られた語りを分析した結果、保育者は粘土遊びに対して自由度の高さを感じており、それについて良さと困難さという両義的な意味づけをしていることがわかった。明確なゴール設定のない、作品作りに限らない粘土遊びの場面において、子どもの表現への向き合い方に保育者は困難感や葛藤を抱いていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の保育所や幼稚園で乳幼児期を過ごした人ならば、誰でも一度は粘土遊びをしたことがあるだろう。粘土は、日本の幼稚園草創期から現在に至るまで、幼児教育・保育の現場に古く長く取り入れられ続けている教材の一つである。なぜこれほど保育現場に粘土遊びが浸透しているのか。この問いの答えには、子どもの育ちや表現に対して、保育者が求める何らかの価値観が潜んでいると考えられる。本研究は、保育者やその背景社会が粘土遊びに対して有する考え方や価値観を明らかにすることにより、粘土遊びの現代的意義と、幼児教育・保育における表現活動の今度の可能性と方向性を探る試みの一端である。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify nursery teachers' thinking and values regarding clay play in Japanese ECEC. As a result of semi-structured interviews survey with 14 nursery teachers, the following was revealed. The nursery teachers felt that they had a high degree of freedom in the practice of clay play in nursery schools and kindergartens and found that clay play had both positive and difficult aspects. In addition, the nursery teachers had different purposes for clay play in free-flow play and for clay play that was intended to create something as the main activity. If there is no clear goal setting with clay play and if it is not limited to creating things, the nursery teacher can experience difficulty. The degree of freedom of clay play was not fixed, and the nursery teacher was aware that this boundary fluctuated. This makes it difficult for nursery teachers to reflect on the practice of clay play and to consider the necessary expertise.

研究分野：保育学、幼児教育学

キーワード：粘土遊び 保育者 価値観 表現 保育文化

1. 研究開始当初の背景

近年、乳幼児期の体験の重要性への認識が高まり、国際的な規模で幼児教育・保育の質の向上および改善に向けた取り組みが進められている (OECD, 2012 など)。こうした中、子どもの表現活動や、アートによる幼児教育・保育の実践にも注目が寄せられている (佐藤ら, 2003 など)。その成功例として挙げられるイタリアのレッジョ・エミリア市の実践は (OECD, 2004)、日本での注目も高く、ここ数年研究が盛んに行われ、レッジョ・アプローチとして幼児教育・保育現場への導入も見られる。しかしながら、一つのアプローチとして新奇性のみが部分的に取り入れられることへの危惧も指摘されており、保育の質をそれぞれの国や地域の歴史文化や思想哲学の中で位置づけていくことの重要性も求められている (秋田, 2013)。

日本の幼児教育・保育に古くから存在する遊び、表現活動の一つに、粘土遊びがある。1876年に日本で最初の公的幼稚園が創設され、その時に粘土が教材として取り入れられたことに始まる (文部省, 1979)。そして、筆者が 2015 年に東京都内 3 区および静岡県 H 市にある保育所・幼稚園・認定こども園の全園を対象として行った質問紙調査の結果では (回収率 73.0%、295/404 園) 回答を得られた 295 園のうち 99.3% の園で粘土遊びが行われていることが明らかとなっている。なぜ、粘土遊びはこれほど幼児教育・保育現場に浸透しているのだろうか。

こうした現状に反して、子どもの粘土遊びに関する研究は、圧倒的に手薄であると言われている (中川, 2001)。これまでの研究では、幼児の粘土造形の発達段階を明らかにした研究 (中川, 2001 など)、美術教育的な立場から有効な指導方法を検証した研究 (神谷, 2009 など)、理想的な環境設定について検討した実践研究 (前嶋, 2009 など) があり、いずれの研究においても粘土遊びの有用性が提唱されている。しかし、これらの研究はいずれも個別のケースを扱ったものであり、幼児教育・保育における粘土遊びの位置づけや歴史的な展開を包括的に捉えるものではなかった。

ブルナーによれば、特定の教育実践について何らかの検討を行おうとするならば、その実践の担い手が有しているフォークペダゴジーを考慮に入れる必要があるという (Bruner, 2004)。フォークペダゴジーとは、実践者の養成課程の中で明確に教えられたり、何らかの教育理論があったりするわけではないが、教育という営みの中で個々人や集団が直感的に従ってしまう考えや価値観のことである (Bruner, 2004)。日本では、幼稚園草創期から現在に至るまで、幼児教育・保育の現場に粘土遊びが生き続けている。この事実は、粘土遊びを行うことが、乳幼児期の子どもの育ちにとって望ましいとされる価値観が存在することを表していると言える。そして、こうした実践のあり様には、子どもの遊びや表現活動に対する保育者の何らかの考え方や信念も内包されていると考えられる。こうした問いから、粘土遊びに潜むフォークペダゴジーや保育文化的な価値観の解明に取り組みたいと考えた。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、幼児教育・保育現場における粘土遊びの実践が、どのような考え方や価値観によって支えられているのかを明らかにすることを目的とする。これを明らかにするために、幼児教育・保育現場には粘土遊びに対するどのような考えや価値観が存在するのか、また、保育者は粘土遊びをどのように意味づけ、保育実践の中にどのように位置づけているのか、という二つの問いを立てた。そして、これらの問いを明らかとするために、本研究では、保育者の語りとその背景社会にある言説という二つの側面から探ることとした。

こうした検討を通して、粘土遊びの現代的意義と実践をめぐる課題を明示すると共に、幼児教育・保育における表現活動の今度の方向性を探る一助としたいと考える。

3. 研究の方法

(1) 粘土遊びに関する言説分析

幼稚園草創期である明治初期から現在までに出された幼児教育・保育に関する政府刊行物や、国内の主要な文献および先行研究を収集し、粘土遊びに関する記述を抽出した上で、その内容を概観した。筆者が過去に行った文献調査で得たデータを基に、本研究の視点から再分析した。

(2) 粘土遊びに関するインタビュー調査

保育者を対象として、半構造化インタビュー調査を行った。インタビュー対象となった保育者は、東京都内および静岡県 H 市内の保育所・幼稚園・認定こども園に勤務する保育者 14 名 (A ~ N) である。調査協力者の概要 (表 1)

表 1: 調査協力者の概要

	園種	性別	職位	保育歴
A	公立保育所	女性	担任	6 年
B	公立認定こども園	女性	担任	13 年
C	私立保育所	女性	担任	7 年
D	公設民営保育所	女性	担任	2 年
E	私立幼稚園	女性	担任	8 年
F	私立保育所	女性	担任	8 年
G	私立保育所	女性	担任	20 年
H	私立保育所	女性	担任	2 年
I	私立保育所	女性	担任	2 年
J	私立保育所	女性	担任	11 年
K	私立保育所	女性	担任	15 年
L	公立幼稚園	女性	主任	22 年
M	私立幼稚園	女性	担任	20 年
N	私立幼稚園	女性	主任	37 年

は、いずれも調査時点のものである。具体的な質問項目としては、園で行っている粘土遊びの

実践方法に関すること、粘土遊びで良さとして感じていることと困難に感じていること、そしてその理由、粘土遊びで印象に残っているエピソードなどである。

なお、本研究のインタビュー調査は、こども教育宝仙大学学術研究倫理委員会より承認を得ており、調査の手続きおよび内容は適切に設計されている。

4. 研究成果

(1) 粘土遊びに関する言説の分析の結果、幼児教育・保育における粘土遊びの教育的価値は、時代とともに新たな視点が見出され、拡大していったことが明らかとなった。幼稚園草創期の粘土遊びは、フレーベルの「恩物」を紹介する海外文献の翻訳書に倣ったものであり(桑田, 1878、東京女子高等師範学校附属幼稚園, 1878) その教育的役割は、手本を模倣するためという限定的なものであった。その後、徐々に保育者と子どものあいだには生活経験をもとにした指導が生み出されていき、課題にそった製作から、子どもが自由に遊ぶための材料という要素が加わるといった変容が見られた。国が定めた初めての幼児教育の指導書である「保育要領」(文部省, 1948)では、その中に書かれた保育内容の一つ「製作」において、「粘土」が最初に登場し最も多く記述されていた。そこでは、「粘土は幼児が最も興味を持って、いろいろの形を作るのによい材料である」とされており、作った作品は「おもちゃとして幼児の遊びを充実させてくれる」とし、その例としてごっこ遊び等が挙げられている。さらに、理想の設備として「粘土、少々、粘土つぼ二個(ふたつき) 粘土板三十」という具体的な記載も見受けられるなど、幼児教育・保育の現場で粘土遊びを推奨する方向性が強く打ち出されていたことがわかる(文部省, 1948)。そして、現場における粘土遊びのプロセスへの着目と臨床的視点の追加により、生活や遊びとのつながり、芸術性のあられ、人間関係の醸成、身体感覚の開放と充足、という教育的価値が新たに見い出され、粘土遊びの価値は拡大していったことがうかがえた。

こうした教育的価値の拡大の一方で、粘土遊びが粗雑な扱いにあるということや、慣習化されていたり、課業的で結果偏重になっていたりするという指摘も見受けられた。こうした指摘は昭和の初めにはすでに存在しており、理想と現実の乖離という問題を孕みつつ、粘土遊びが幼児教育・保育の現場に取り入れられ続けてきたことがわかった。

(2) 保育者へのインタビュー調査によって得られた語りから見出された概念について、一部を抜粋して以下に報告する。

まず、粘土遊びの実践状況に関して、粘土遊びの多くが自由遊び場面で行われていると語られた。そして、園で最も日常的に用いられている油粘土は、自由遊び場面の他は、「何かメインの活動が別にあるって、全員だと危ないから人数を分けて、じゃあ、こっちは粘土でもしとこうかみたいな、そういうサブの役で使われる」(A 保育者)という語りがあるように、「サブの役」として保育実践の中に位置づけられていることがわかった。その一方、粘土遊びが主活動になる場合には、行事と関連し、造形することや作品作りを保育者が明確に意識し、計画的かつ意図的に行われていることが語られた。こうした場合、粘土の種類も紙粘土を使うことが多いとも語られており、「それを最終的に祖父母にあげるとか、お家に持って帰るとか」(B 保育者)というように、主活動となる粘土遊びでは、保育者は作品として残るものを目指していることがうかがえた。これらのことから、自由遊びの中で日常的に行う粘土遊びと、主活動として行う粘土遊びでは、保育者はそれぞれ異なる意味づけをしていることが読み取れる。そして、「もう用意されているものっていうか、代々引き継がれているものがそういうものだったりするので、どうしても何となく私の中に粘土遊びに対する固定観念みたいなものがあって」(C 保育者)という語りがあるように、粘土遊びが園の中で慣習化され、固定化された実践様式が存在している実情がうかがえた。

インタビューでは、保育者はこれまでの経験から、粘土遊びにさまざまな良さを感じていることが語られた。語りの多くに共通するのは、粘土遊びのもつ自由度の高さについてであった。「粘土は落ち着ける道具でもあり、友達同士で意外とコミュニケーションもとれる道具であり、本当にいろいろな遊びができるから」(E 保育者)という語りがあるように、作ることに限らず、感触を楽しむ、粘土遊びで落ち着く、コミュニケーションツールになるなど、粘土の持つ汎用性に多様な良さを見出していることがわかった。こうした良さに、保育者自身も恩恵を感じていることが「いろいろ粘土に助けてもらった」という語りからうかがえる。この他にも、「扱いやすい」(D 保育者)、「気楽」「安全」(M 保育者)という言葉からは、制約が少なく、多くの準備や計画を必要としないことも、保育者にとっての利点につながっていることがうかがえた。

その一方で、自由度の高さゆえに、保育者が困難感を抱いていることも語られた。「保育者がつかないと場が荒れていく」、「その場にいる大人が試される」(B 保育者)という語りからは、粘土遊びの実践に求められる保育者の専門性に対する模索がうかがえる。そして、「粘土ってどこまでが粘土遊びなんだろうっていうような、自由度が高すぎて、なかなか線引きが難しい気がする」という粘土遊び特有の困難さに迷いながらも、「粘土遊びは常識の範囲内という感じ」(E 保育者)というように、現場において保育者間で粘土遊びに関する情報交換や経験の共有があまりなされていないという状況も読み取れる。

以上のことから、保育者は、粘土遊びに対して自由度の高さを感じており、それに対して良さと難しさという両義的な意味づけをしていることが明らかとなった。また、自由遊びの中で

行う粘土遊びと、主活動として作品作りを意図して行う粘土遊びとは、それぞれ異なる意味づけを行っていることもうかがえた。保育者は、粘土遊びの持つ自由度の高さを固定化されず常に揺らいでいるものとして認識しており、そこに保育実践上の多様な利点を見出していた。その一方、自由度の高さは保育者の困難感にもつながっており、明確なゴール設定のない、作品作りに限らない粘土遊びの場合において、子どもの表現への向き合い方に保育者は難しさや葛藤を感じていることも明らかとなった。保育者が実践の中で感じている粘土遊びの良さを、保育者として求められる専門性とのつながりの中で十分に検討することが困難となっている実情を示唆する結果であると言えるだろう。さらに、園での粘土遊びの実践には、慣習化され固定化された実践様式が存在していることも明らかとなったことから、こうした背後に根付いているフォークペダゴジーの解明と併せてさらに考察していくことが今後の課題である。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

Yoshiko NANYO, The Teachers' Recognition and Belief about Clay Play in Early Childhood Education and Care in Japan. The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference. 2019

南陽 慶子、保育・幼児教育現場における粘土遊びの実践に関する研究(2): 質問紙調査による保育者の意識の検討、日本乳幼児教育学会第27回大会、2017

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：南陽 慶子

ローマ字氏名：NANYO, Yoshiko

所属研究機関名：こども教育宝仙大学

部局名：こども教育学部

職名：講師

研究者番号(8桁): 00802597

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yoshiko NANYO
2. 発表標題 The Teachers' Recognition and Belief about Clay Play in Early Childhood Education and Care in Japan
3. 学会等名 The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南陽慶子
2. 発表標題 保育・幼児教育現場における粘土遊びの実態に関する研究(2)：質問紙調査による保育者の意識の検討
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----